教育のひろば

「生きている図書館」を身近に

多文化、共生社会の実現のために

教育ジャーナリスト 池田知隆

「生きている図書館」（Living Library）という活動がいま、欧州を中心に広がっている。元マフィアや移民、同性愛者……といったふだん近づきにくいと感じている人たちを図書館が招き、「本」として貸し出している。来館者は読みたい「本」を借りて、一対一でなんでも質問できる。本の代わりに人を借りるこの活動の目的は、偏見や好奇の目で見られがちな人と語り合い、互いの偏見を無くすこと。多文化、共生社会の実現に向けて示唆に富む試みだ。

京都で初めて開催

「生きている図書館」のキャッチフレーズはこうだ。「表紙で本は決まらない」。人は見た目ではない。どのような政治的、経済的、宗教的環境にいようとも、どのような身体的状態にあろうとも、問題はその人の人間性、という考えがそこにある。人間性で響きあうような社会関係をはぐくんでいこうというのだ。そんな「生きている図書館」の活動が2008年12月6日、京都市の京都国際会館で開かれた。日本での開催は初めてだという（朝日新聞2008年12月7日）。

新聞報道によると、その日、「本」として参加したのは、ホームレスの男性や元薬物依存者、知的障害者、障害者プロレスラーら13人。障害者たちへのITを利用した支援を研究している東京大学先端科学技術研究センターの研究者たちが開いたものだ。

千葉県内に住むアスペルガー症候群の男性（44）は「何度も転職を繰り返し、38歳で初めて診断された」と自分の経験を語った。

「読者」としての立場から、岐阜県の特別支援学校教員（29）はこう問いかけた。「子どものころ、先生がこんなことをしてくれたらよかったと思うことは何ですか」

終了後、この男性は「会話は苦手だが、自分のことを話すことで人の役に立てるのがうれしい」と話していたという。「生きている図書館」の発案者の1人、デンマークのNGO職員ロニ・

アバゲールさん（35）も講演し、「西洋圏中心だった『生きている図書館』が、日本でも開かれることがうれしい」と語った。

ロック音楽祭をきっかけに

この活動は、2000年、デンマークで暴力追放をテーマにしたロック音楽祭の企画として開かれたのが始まりだ。今では、欧州諸国だけでなく、オーストラリアやニュージーランド、トルコなど23カ国に広まり、欧州46カ国でつくる人権擁護機関の欧州会議なども活動を支援している。アバゲールさんはいう。

「デンマークで政府や暴力・犯罪予防のNGOなどに勤務して、このアイデアを具体化した。そのきっかけは、ばかばかしい偏見が、しばしば暴力的な対立を引き起こしているからです。『ヒップホップファン』と『ヘビーメタルファン』の間で始まることもある。だが、相手を実際に知れば暴力に発展しにくい。たとえば、『イスラム教徒は出て行け』なんて毒づいても、知り合いならアラブ人には、『やあ。元気かい』と声をかけて握手する」

誰でも知らない人たちについて偏見をもちやすいが、それを解消する機会はあまりない。アバゲールさんは「メディアでの討論では極端な意見の対立が前面に出て、多くの穏健な考えが軽視されがちです。『生きている図書館』は偏見の犠牲になる人と偏見にとらわれる人の両方に寛容な姿勢を築くことになる。誰かを話題にするより本人と話したほうが理解は進みます」と訴える。

一番の人気はホームレス

ロンドンでの「生きている図書館」活動についての新聞記事もある（2008年6月28日　ロンドン＝土佐茂生、大野博人記者）。それを引用すると―

「What's your prejudice」（あなたの偏見はなに？）とプリントされたTシャツを着たビクトリア・ライトさん。4歳の時に『ケルビズム症』という遺伝病になり、アゴの骨が異常に発達して目が突き出ている。記事に添えられた写真は強いインパクトを与え、キャプションには「私が『独身』『内気』『親を憎んでいる』と思う？　すべて間違い。それが偏見」と語りかけるライトさんとある。

「顔のこと、聞いてもいいかしら？」との女性の質問に、ビクトリアさんは「自分は内気ではないし、親を恨んでもいない」と答える。「じっくりと自分を説明できて気持ちよかった」

2人の女性の笑い声が響き、『あなたを借りて楽しかった』という女性を、ビクトリアさんは笑顔で見送ったという。

この日の「本」は、性転換者、レス

海の恵み　にがりを残した

はかた
伯方の塩®

※伯方の塩®は、自然の風と太陽熱で蒸発結晶させたメキシコの天日塩田塩を日本の海水で溶かして原料とし、CO_2の排出を少なくしています。

伯方塩業株式会社

〒790-0813 愛媛県松山市萱町4丁目-4-9
TEL089-911-4140(代) FAX089-923-9671
ホームページ http://www.hakatanoshio.co.jp/

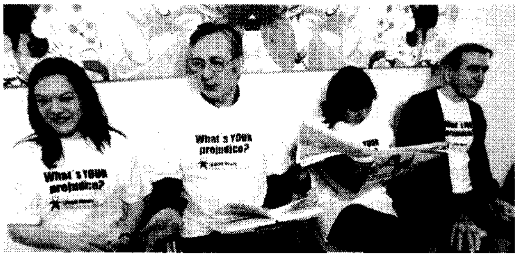
ビアン、イスラム教徒、女性消防士、移民などの26人。イスラム教徒の場合は、「過激派」、「女性軽視」といった偏見にさらされている。「読者」は読みたい「本」を借り、30分間一対一で話を聴くことが出来るが、「本」の方にも多くの発見があったようだ。

「私にも偏見があったと気付いた」とビクトリアさん。視線を感じると「私の変な顔を面白がっている」と思い込んでいた。「人が何かを違うものをジッと見るのは自然なのね。それなのに、勝手に傷ついてきた」。

「読者」の動機は様々。性転換手術をした男性を借りたリンダ・コンスタンブルさんはこんなコメントをしている。

「『生きている図書館の本』は辛い時期を乗り越えてきた人たち。家族も悩んだと思う。私もいつかは激しいときを経験するかもしれない。それを克服するヒントがあるのではと思っています」

このほか、「違う世界に住む人が集うパーティに参加する気分だ」と気軽にやって来た人もいた。この日は、100人の「読者」が利用し、一番人気は「元ホームレス」で8人が借り出したという。



「本」となった人たち

対話から始まる

この記事に触発され、「生きている図書館」のホームページ（http://living-library.org/）を開いてみた。欧州会議の人権教育関係サイトで、この理念と利用法を見てみると、

・・・・・・・・・・・・・・

・「生きている図書館」は正統的な図書館と全く同じように機能する。読者はそこに来て期限付きで本を借りる、

・ただし、ひとつだけ違いがある。「生きている図書館」にある本は人間そのものなのだ、そして彼らと読者の間に会話が始まる。

・そこにある本は、偏見や型どおりの考え、しばしば差別や社会からの排除に直面している人々を代表している。

・本は発言するだけではなく、読者の質問に答えることもできるし、さらに読者に質問をすることもある、彼らもまた学んでいる。

・人権は法的にのみ守られるのではなく、我々一人ひとりがそれを守り、発展させなければならないという考えが、このプログラムの原点である。

・人々が自分と他者の人権を熟慮するように仕向けるために、すべての人には同様の権利があるということに関心

を持たせなければならない。

・・・・・・・・・・・・・・

「本」のリストに並んでいるのはこんな人たちだ。

・フーリガン（サッカーのサポーター）
・同性愛者
・イスラム教徒
・ロマ（昔ジプシーと呼ばれていた）
・警察官
・外観が損なわれた顔の人
・葬儀屋
・避難民
・ホームレス
・完全菜食主義者
・女性消防士

共生の社会に向けて

人は、どうしても知らない人や話したことのない人に対して、一方的な印象を持ちがちだ。それは、「かもしれない」という想像に始まり、いつしか勝手に「こうに違いない」に変わっている。無知が偏見を生み、偏見が差別を生み、差別が蔑視を生み、蔑視は相手を抹殺しようという感情を起こさせる。

このほか政治家やジャーナリストもいる。

図書館の側にしても、「本」を探し出すのは、簡単なことではない。多くの時間と労力がかかり、説得が必要な場合もある。イスラム教徒なら過激な原理主義者のように、かえって偏見を強めかねない人を選ぶのを避けている。

読みたい「本」との対話は30分間とはいえ、実際に会って話をしてみるのは、有益だ。「本」も、「読者」が抱いているだろう偏見に正面から向き合っていく。そうすることで、実は、双方が偏見を持っていたことに気づいていく。実際に「生きている図書館」を利用した人のほとんどが「他の人にも勧める」と答えているという。

かつて「エレファントマン（象人間）」という英国の映画が評判になった。先天的に顔が変形して、サーカスの見世物となっていた男をある貴族と医者が引き取ったところ、その頭脳明晰な事実を知るというストーリーだ。その映画の一シーンで、男がバイブルの「詩篇23篇」をすらすらと諳んじている光景が、今も鮮明に浮かびあがってくる。

とかくすると、健康な者は、顔形、身体的な特徴を見て判断し、その人を差別してしまうことがある。そんな無知、偏見を克服していくにはまず、対話から始めなくてはならない。最初は、うわべだけの「興味」でも、話すことで「関心」につながれば、確実に「無関心」ではなくなる。それが、偏見をなくす流れになる。この「生きている図書館」の活動は、カトリック文化の強いポーランドだったら同性愛者への偏見を取り除くのに、ハンガリーなら警察官とロマ人の対立を和らげるのにいいかもしれない。

日本でも、中国やブラジルから来た人たちに「本」になってもらえばいい。「本」になる人も「読者」の疑問を知ることができ、両方に寛容な姿勢を築くことになる。誰かを話題にするよりも、本人と直接話した方が理解も進むはずだ。

いまの日本社会をみると、一抹の不安を感じることがある。私が小、中学生のころ、明らかにハンディを持っている人と一緒に勉学に励んだことを覚えている。しかし、１９７９年に養護学校が義務化されたころから、知的障害者や視力障害者や肉体的なハンディ

キャップの人たちと分離し、この人たちのための特別支援学校と普通学校とを分けてしまった。本来なら、肉体的なハンディを持っていても、普通の能力を持った人たちは同世代の子と、友達になり、一緒に学びたいと願っている。だが、現在の制度では、特別支援が必要ということで障害をもっている人が分けられ、健常者はその人たちをいつしか特別視してしまいがちだ。

「語り部」も「本」

図書館は本来、紙でできた書物を読むための場所と思われている。多彩な人たちを招いて講演や講座、展示会などの活動を行ったり、地域の伝統文化を担ってきた人や戦争体験をもつ人たちを「語り部」として活用したりしている図書館も少なくはない。だが、社会が複雑化していく中で、「生きている図書館」のような、もっと人間中心の企画があってもいい。

図書館の活動を支えるものとして「図書館の自由に関する宣言」があるが、そこにはこう書かれている。

「図書館は、基本的人権のひとつとして知る自由をもつ国民に、資料と施設を提供することをもっとも重要な任務とする。この任務を果たすため、図書館は次のことを確認し実践する。

第1　図書館は資料収集の自由を有する

第2　図書館は資料提供の自由を有する

第3　図書館は利用者の秘密を守る

第4　図書館はすべての検閲に反対する

図書館の自由が侵されるとき、われわれは団結して、あくまで自由を守る」

よく読めば、図書館の任務は、書物に限定するようには書かれてはいない。知る自由をもつ国民に、資料と施設を提供することであるという。書物の本当の姿とは、紙の上の文字だけではなく、本が読まれることにより、浮かび上がるその背後の豊かな世界のことであるともいえる。「生きている図書館」はいわば、多彩な人を「本」として抱え込んだコミュニティー・シンクタンクともいえる。図書館も今後、このようなコミュニティー・シンクタンクの社会的役割を担っていかなくてならない。

世界は一冊の本

詩人、長田弘の『世界は一冊の本』と題した詩がある（別項）。

その中で長田さんは、「書かれた文字だけが本ではない」、「日の光、星の瞬き、鳥の声、川の音だって、本」であり、「世界という開かれた本」「人の胸に抱かれた人生という本」もある。「どんなことでもない。生きるとは、考えることができるということだ」と言っている。

近未来には、自宅のパソコンから世界中の図書館の蔵書が見られるようになるだろう。そのとき、図書館に何が求められるのだろうか。蔵書の数とか収集分野の広さなどはあまり問題とならなくなるかもしれない。文字だけでなく、人からも学びたい人のため、要望に応じた「本（人）」を集めて、貴重な知識として蔵書することを考えれば、図書館はもっといきいきと豊かな世界になるのではないか。

無名の人とはいえ、一人の人生はまた、他の人にとって貴重な「書物」になりうる。ケータイ、電子メールが普

及しているが、人と人とのコミュニケーションは必ずしも豊かになっているとはいえない。もし「生きている図書館」が身近なところにできたら、私も利用してみたい。今の日本社会に必要なのは、隣人とのちょっとした語り合いの大切さを見直すことではないかと思う。

世界は一冊の本

長田　弘

本を読もう。
もっと本を読もう。
もっともっと本を読もう。

書かれた文字だけが本ではない。
日の光、星の瞬き、鳥の声、
川の音だって、本なのだ。

ブナの林の静けさも、
ハナミズキの白い花々も、
おおきな孤独なケヤキの木も、本だ。

本でないものはない。
世界というのは開かれた本で、
その本は見えない言葉で書かれている。

ウルムチ、メッシナ、トンデブクトゥ、
地図の上の一点でしかない
遥かな国々の遥かな街々も、本だ。

そこに住む人々の本が、街だ。
自由な雑踏が、本だ。
夜の窓の明かりの一つ一つが、本だ。

シカゴの先物市場の数字も、本だ。
ネフド砂漠の砂あらしも、本だ。
マヤの雨の神の閉じた二つの眼も、本だ。

人生という本を、人は胸に抱いている。
一個の人間は一冊の本なのだ。
記憶をなくした老人の表情も、本だ。

草原、クモ、そして風。
黙って死んでゆくガゼルもヌーも、本だ。
権威をもたない尊厳が、すべてだ。

200億光年のなかの小さな星。
どんなことでもない。生きるとは、
考えることができるということだ。

本を読もう。
もっと本を読もう。
もっともっと本を読もう。

（「世界は一冊の本」）

スペインの「生きている図書館」

（注）
ウルムチ…中国新疆ウイグル自治区の中心都市。
メッシナ…イタリア南部、シチリア島北東部にある港湾都市。
トンデブクトゥ…アフリカ西部、マリ中部の商業都市。サハラ砂漠を縦断する隊商路の要地。
ネフド砂漠…サウジアラビア北部の砂漠。
マヤ…マヤ族の略。
ガゼル…アフリカからモンゴルの草原や砂漠に住むウシ科ガゼル属などのレイヨウの総称。
ヌー…アフリカの草原に群れをつくって暮らすウシ科の哺乳類。

（写真はいずれも「生きている図書館」のホームページより）

「Living Library Japan」事務局
（電話&FAX　03－5452－5490）
Eメール：info@Living-library.jp

NL

2009

6

CONTENTS

教育の広場

●「生きている図書館」を身近に
多文化、共生社会の実現のために 4

NEWS ROTARY

●メディアの信頼を揺るがせた2つの「虚偽報道」 10
現代人の健康の維持・増進とL－カルニチン 15
緊急時の電力供給をサポートする斬新なデザインの風力発電装置 22
人とクルマと環境の理想的な関係を目指すエコタイヤ
ダンロップ「ENASAVE（エナセーブ）」シリーズ 26
塩昆布風の発酵食品「舞昆」 30
特別展　きのくにの精華　和歌山県立博物館 61

REGULARS

女性ホルモンの神秘と効用 21
医療事情のウラオモテ 34
獣医師は、なぜ、動物の言葉がわかるの？ 41
回虫博士の世界漫遊紀行 42
あのときこんなこと 44
どれみの鼻歌 51
たかが　われらが日々？ 54
なまずのひとりごと 58
どこで憩うか―温泉――日本の島の湯宿巡り③ 62
食と健康―スプーン1杯の油で活性化する体　植物油で長生き 66
リビング特集―和インテリア『表具』の美 69
LIBRARY 72
6月の運勢 75
編集後記 76

表紙写真　森村　進